

1960年代から90年代におけるマンガの中の障害表象についての研究

—医学モデルから社会モデルへの転換期において—

同志社大学社会学部社会福祉学科

1109 20 2001

安達理久也

指導教員：鈴木良

〈概要〉

マンガ史が始まって以来、障害に関連するテーマはさまざまなマンガで描かれてきた。本研究では、障害者の描き方から、その時代ごとの障害者に対する偏見や差別の歴史を読み解くことができるかどうかを障害観の推移と共に分析した。

この結果、1980年代以前では、障害者は排除・隔離・差別の象としてのみ描かれており、その背景には医学モデル的な障害観が一般的であったことが原因であることが分かった。

1980年代年代初頭に、社会モデル的な障害観が出現したことで、マンガにおける障害者の描かれ方に変化が認められるようになった。作品における障害者は、排除される存在から、1) 対等な人間として受け入れられる存在、2) 社会に主体的に参加していく存在へと変化したことが明らかになった。

本研究の意義は、障害観の変遷を遡りながら、時代ごとの作品がどのように障害を表象しているのかを具体的に分析することによって、障害観の変容過程を示す点にある。

【目次】

序章

- 第1節 研究背景と目的
- 第2節 先行研究

第1章 分析方法の概要

- 第1節 障害概念の推移
- 第2節 マンガにおける障害概念と障害表象の関連
- 第3節 分析の視点

第2章 モデルごとの作品

- 第1節 医学モデル
 - 1-1 「漫画家残酷物語」
 - 1-2 「キリヒト賛歌」
 - 1-3 「兄貴にさようなら」
 - 1-4 「どろろ」
 - 1-5 「コンチェルト 『愛 さよならは秋の歌』」
 - 1-6 「ブラック・ジャック」②-第12話
 - 1-7 「遠い讚美歌 『白い部屋の二人』」

第2節 社会モデル

- 2-1 「風子のいる店」
- 2-2 「遙かなる甲子園」

2-3 「我が指のオーケストラ」

2-4 「歩いていこう」

2-5 「てっちゃん」

2-6 「静かなる夜のほとりで」

終章 まとめ

引用文献

参考にしたマンガ作品

序章

第1節 研究背景と目的

近年、マンガは世界中で広く受け入れられ、様々な世代や背景の人々に親しまれている。私もその一人であり、幼少期からマンガを読むことが、生活の一部となっていた。そして、大学2年生の時に受けた授業がきっかけとなり、マンガを一つの物語として読むだけでなく、社会について考えるきっかけとして、マンガを位置づけるようになった。その授業は、アニメや映画、ドラマなどを通して社会問題を読み解こうとする内容のものであったことから、マンガを通して、社会的なテーマや問題をどのように表現しているかを理解することも、重要な研究テーマになると考えた。特に、障害に関する描写や取り組みがどのように表現されているのかを読み解くことで、時代ごとの障害の捉えられ方を知ることができると考えられる。マンガは社会の鏡のような存在であり、時には社会的な変化や問題提起の場となる。

そこで、本稿では障害に関するテーマに限定することで、社会的な認識や態度に変化が生じているのかについて考察する。この研究では、まず、障害に焦点を当てたマンガの選定と分析を通じて、作品における障害の描写が、その時代ごとの障害概念に即した表現になっているのかどうか確認する。障害概念の推移は大きく分けて、医学モデルから社会モデルへの転換期に限定することで、マンガの中での障害表象がいかに変化しているかについて分析する。障害概念について、障害者権利条約では以下の様に記されている

「障害が発展する概念であることを認め、また、障害が、機能障害を有する者とこれらの者に対する態度及び環境による障壁との間の相互作用であって、これらの者が他の者との平等を基礎として社会に完全かつ効果的に参加することを妨げるものによって生ずることを認め、(以下省略)」(外務省 前文[e]) と述べられている。

上記の内容から、障害が個人に帰属するという医学モデル的な障害概念ではなく、社会との相互作用によって生じる、環境や意識における障害の在り方という、社会モデル的な障害概念が一般的であるということが分かる。こうした、障害概念の推移がマンガの世界においても同様に確認することができるのかについて分析を行う。このような分析を通じて、マンガが障害に対する理解と受容をどのように推進しているかを明らかにすることが、本研究の主要な目的となる。

第2節 先行研究

本論文において、研究テーマの基礎となる視点や考え方を得ることができた三つの研究を取り上げる。

第一に、塙幸枝(2015)の研究は、映画における障害表象に焦点を当てており、障害の概念に関連するモデルを使用して、障害表象を解釈する可能性とその制約について論じてい

る。その際に、具体的な映画作品を取り上げ、そこに描かれる障害表象を、障害概念と対応させながら、筆者の視点で考察している。

また、映画における障害が「コミュニケーションの問題」として描写されている点にも着目しており、「障害/健常」のカテゴリーが障害を取り巻くコミュニケーションのあり方をいかに規定するのかについて検討している。その過程で、障害概念と映画における障害表の対応関係を分析し、両者の相互作用を理解するための洞察を提供している。

第二に、三島亜紀子（2010）の研究では、児童文学に描かれた障害表象を考察し、社会における障害者観と照らし合わせながら、児童文学における障害者観の変遷を分析している。具体的には、1970年代ごろに描かれてきた障害児殺し事件をテーマとした作品や、医学モデル的な障害観を与えるとして、表現の仕方が問題となった「ピノキオ」などの作品を取り上げている。その結果として、筆者は次のように述べている。

「本章では、児童文学に描かれた障害者観を考察してきたが、この四十年ほどをみても、障害者観は大きく変化してきたことが分かった。こうした変化は社会における障害者観の反映である。これと同時に、逆に（子ども）社会に影響を与え、読者の障害者観を変化させることもあるだろう。」（三島 2010：125）

このことから、社会における障害者観と児童文学における障害者観には対応関係があり、なおかつ、相互作用的に関わりあっている可能性もあることが分かる。物語を一つのコンテンツとしてのみ捉えるのではなく、社会との結びつきにおいて考えることで、表象の危険性と可能性について書かれている。

第三に、永井哲（1998）の研究では、作者自身が聴覚障害を持つ中で、障害が描かれているマンガ作品を独自に収集し、障害の描かれ方として問題のあるものや、評価できるものを中心に取り上げ、まとめている。筆者はマンガについて次のように述べている。

「マンガというのは、現在の若者向けのマンガ（コミック、劇画、その他すべてを含めて）の形に限らず、そもそもの昔から、その時にその時の風俗、風潮をストレートに反映する媒介であったはずだと思います。だから、各作品の中の障害者の描かれ方は、そのままその時代の社会の人びとの、障害者への見方を反映しているのだと思います。」（永井 1998：243）

このことから、マンガは社会を映し出す鏡のような存在であると言える。そして、永井は1950年代から1990年代の期間において、障害表象がなされているマンガ作品を合計で333作収集している。作品ごとの描かれ方、その時その時の時代に、障害者がどういう見られ方をしていたのかも含めて書かれている。自身の持つ聴覚障害以外にも、障害について、誤った認識や偏見のもとに描かれている内容であるかどうかを、筆者自身の観点から点検して

いる。「間違っているものをそのまま受け取ってほしくない」という筆者が、当事者の立場から、それぞれのリアルを書いている。

第1章 分析方法の概要

本章では、マンガにおける障害表象が医学モデルから社会モデルへと転換していることを分析するための方法について述べたい。

第1節 障害概念の推移

まず、「障害」の捉え方として、医学モデルが存在する。この捉え方は19世紀において発展期を迎えた近代医学の科学性を根拠に、医療専門家が障害を医療化することによって、確立されることになった (Barns, et al.1999=2004)。医学モデルにおいては、障害を個人に帰属する事象だとして、その事象に伴う不都合な問題は、その個人の責任として捉えられる。

一方、社会モデルとは、医学的な機能不全を意味するインペアメントと社会に構築されている障壁を意味するディスアビリティが存在するものと考えている。そして、ディスアビリティこそが障害者の社会における生活を困難にしているものであり、それらがあらゆる場面で存在する社会は障害者にとって、行動や意思を制限される社会であるとされている。このことから、障害をインペアメントとしてのみ捉えるのではなく、ディスアビリティの解消こそが真に目指されるべきものであるとしている。また、インペアメントについて松岡は次の様に述べている。

「インペアメントのある身体を意識させられるのは社会的な障壁が存在しているからに他ならないということである。」(松岡 克尚 2013, 17 頁)

上記のことから、社会のディスアビリティが当事者に不利益を実感させることで、インペアメントを有する身体を意識せざるを得ないということである。例えば、ろう者であれば、聞こえないということ、それ自体が欠損とみなされるわけではないが、そこに社会的な障壁が存在することで身体の欠損として自覚してしまうのである。

しかし、社会モデルはインペアメントを拒絶しているわけではなく、受け入れ包摂しようとするモデルである。つまり、インペアメントという個人の文脈で語られていた問題を社会という広い範囲で扱うことを可能にした考え方であるといえる。それでは、障害概念をめぐる医学モデルから社会モデルへの転換はいつごろ生じたのか。

そもそも障害概念の発生期を特定することは難しいが、少なくとも1948年の「世界人権宣言」にはすでに障害に関する記述を認めることができる。その後、1953年以降に展開されるノーマライゼーションの理念や、1980年の「障害者の権利宣言」、1981年の「国際障害者年」、1983年の「国連・障害者の10年」などの契機とともに、障害概念は発展を遂げてきた。このような流れに対して、1980年代初頭に、医学モデルと社会モデルの区別や、

社会モデル的な障害観を主張する議論が現れてきた。

第2節 マンガにおける障害概念と障害表象の関連

障害概念については医学モデルから社会モデルへの転換が示すような障害観の推移が認められるが、それは表象の水準における障害の描かれ方についても当てはまるのだろうか。ここではマンガ史におけるいくつかの作品を取り上げ、制作年が障害概念をめぐる学説史との関係においてどの段階に位置するのかに注目し、その障害表象が当時の障害概念に対応し得るのかどうかを検討した上で、障害表象の変遷における大まかな傾向を提示する。

既に述べたように、医学モデルから社会モデルへの移行期は1980年代初頭とみることができる。そのため、1980年代初頭をひとつの区切りとし、その前後で障害の描かれ方に医学モデル的、社会モデル的な特徴を見出すことができるかということが以下の研究の焦点となる。

第3節 分析の視点

マンガ史が日本で始まって以来、障害というテーマは様々な作品において描かれてきた。その歴史を辿ると、その時代の障害者の世間一般からの見られ方を知ることができるとともに、偏見や差別の在り方も同時に確認することができると考えられる。

上記の目的を遂行するために、本研究を行うにあたって参考にした、「映画における障害表象」における映画の中での障害者の描かれ方は、医学モデルと社会モデルを一つの軸に据えていた。私はまず、2つのモデルをマンガに応用し、マンガの中での障害の描かれ方を分析する。「障害の医学モデル」から「障害の社会モデル」への転換に注目することで、それぞれのモデルが提起する障害概念を確認する。その上で、それらと障害表象の変遷との関連を明らかにする。

次に、障害の医学モデルと社会モデル、それぞれの構成をマンガにおける表象と照らし合わせながら、各モデルに対応する作品群を列挙していく。列挙する中で、その作品の内容を簡潔に紹介したうえで、どのような部分はその時代ごとのモデルに即した内容になっているのかについて、具体的なシーンを取り上げながら確認していく。

また、障害の社会モデルと医学モデルを区別する際に、当事者である登場人物たちが経験する障壁に対して、当事者以外の人物が意識的であるかどうかを基準とする。例えば、医学モデル的な障害の描かれ方がされていながらも、それを当事者の障壁と捉えず、周囲の態度や物理的環境の中に存在する障壁と捉えている際には、社会モデルの作品に分類する。一方、医学モデル的な描かれ方をされたまま、そういった事態に言及されることなく物語が終了してしまう場合は医学モデルの作品として分類する。

第2章 モデルごとの作品

本章では、1960年代から1990年代における障害を扱ったマンガ作品の一部を取り上げ、

作品ごとのあらすじと、障害表象の具体的な場面を列挙する。そのうえで、マンガにおける障害観の医学モデルから社会モデルへの転換について述べたい。

第1節 医学モデル 表1：1980年代初頭（社会モデルの出現期）以前の作品

制作年	作品名	扱われている障害
1963	「漫画家残酷物語」②-第6話=窓	身体障害
1970-1971	「キリヒト賛歌」	身体障害
1971	「兄貴にさようなら」	言語障害
1971-1972	「どろろ」	言語障害
1973	「コンチェルト 『愛 さよならは秋の歌』」	聴覚言語障害
1974	「ブラック・ジャック」②-第12話	奇形児
1975	「遠い讃美歌 『白い部屋の二人』」	言語障害

「まんがの中の障害者たち」（資料編 聴覚・言語障害者及び それに関連する内容が登場する漫画を基に筆者作成）

1-1 「漫画家残酷物語」

ある小さなアパートに引っ越してきた若き漫画家志望の青年が住んでいた。向かいのアパートに住む、窓辺で本を読む少女が、いつもその窓から見えた。青年は毎日窓越しに少女を見守り、その瞬間が彼の楽しみだった。冬になり、窓の霜を使って文字を書くことに興じることが習慣になった彼は窓ガラスに文字を書き込み、「君が好きだ」という気持ちを表現する。そして、少女も窓に文字を書いて返信し、「ありがとう」と感謝の気持ちを示す。

しかしその後、窓の向こうからの返信が途絶えた。青年は心配になり、再び窓に「どこか悪いのですか？」と書き込むもカーテンは開かれなかった。ある日、青年は近くのたばこ屋へ行くため外出すると、近所のおばあさんたちの噂話を耳にする「年頃でしたからね、オシだったことを苦にしたんでしょう。そうとしか考えられないじゃありませんか。」（永島慎二 1967：189）という場面で、物語が終わる。



189

出典:『漫画家残酷物語』②-第6話=窓189頁より

こうした構成は障害を持っていることは救いようのないことだというメッセージを持っており、この作品が書かれた時代における、障害者の生きづらさを簡潔に描いている。今では、この作品の様に、自分の障害を相手に伝えないままに死んでしまわずに、それを受け入れることのできる人か、そうではないかを見極める段階が存在するだろう。

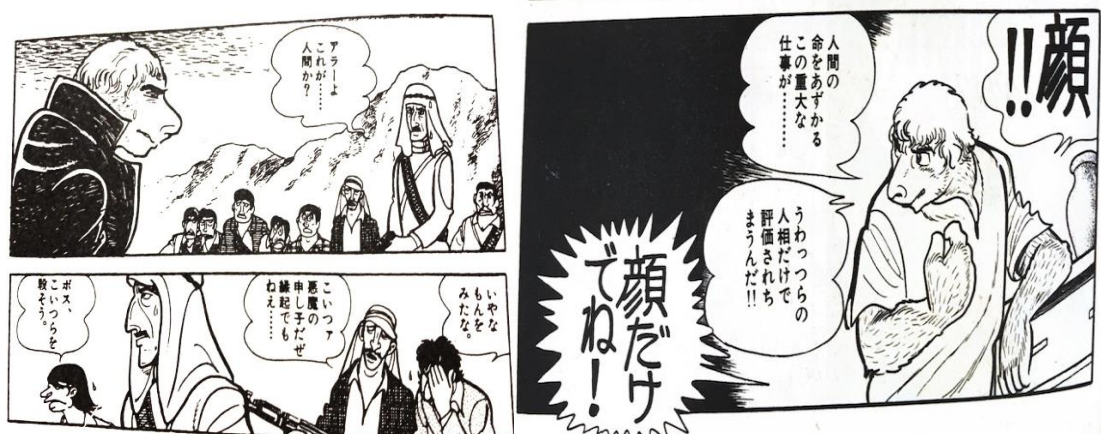
ただ、それは国際障害者年以來、障害者が地域社会の中で生きる事が前よりは当たり前になってきて、障害者も同じ人間だという認識がある程度、人々の間に広まってきている今だからこその言えることであると考えられる。このことから、医学モデル的な障害の捉えられ方が見て取れると同時に、彼女の生きてきた時代、環境がそれほど差別に満ちたものだったことが分かる。

1-2 「キリヒト賛歌」

この作品の中心になっているのは、「モンモウ病」という、かかると骨格が変化して、まるで犬のような顔になってしまう奇妙な病気である。主人公の桐人は医者であり、この病気

の治療に取り組む中で、彼自身がこの病気にかかってしまう。犬の様に變形した顔は元に戻らず、「見世物」として大陸へ連れていかれ、苦難の旅が始まる。

どこに行っても人間として扱われず、「人間以下の犬」として扱われ、悪魔に憑つかれているとして恐れられ、彼の姿を見た者は「アラーよこれが……人間か？（中略）ボス、こいつらを殺そう。」（手塚治虫 1974：233）と、危うく殺されそうになってしまう場面にも遭遇する。また、医者として瀕死の病人を必死に治療しても感謝されるどころか、石を投げられ追われることもあった。彼の人間性を見る前に、外見だけで犬だとか悪魔憑きだと、レッテルを貼られて敬遠されてしまうのだった。せつかく治療した患者を人々の偏見のために死なせることになった桐人はやり場のない怒りに叫ぶ。「顔!! 人間の命をあずかるこの重大な仕事が……うわつつらの人相だけで評価されちまうんだ!! 顔だけでね!」（手塚治虫 1974, 215 頁）



出典:『きりひと賛歌』(中) 233 頁より

出典:『きりひと賛歌』(中) 215 頁より

この作品に登場する多くの人々は人間性を見る前に外見だけで彼を人間扱いしようとしていない。現実の障害者も同様に「聞こえない」「見えない」「歩けない」そうした表面上の情報をもとに、人間性まで否定されてしまうことがある。そういった反応は、偏見や無知を多分に含んだ医学モデルのように、障害をその人自身の問題とする考え方が見受けられる。

1-3 「兄貴にさようなら (『愛と死の砂時計』)」

この作品は明るく優しい妹と真面目で誠実な兄の二人が主な登場人物である。妹の詠子は友達と下校中に、手話で会話する人を見つける。そこで、「みじめに見えちゃうな」といった友人を「およしなさいよ あの人がたちだってなりたくてオシになったわけじゃないんだから」(和田慎二 1974：170) と言ってたしなめる。ところが数日後、兄が連れてきた婚約者が「オシ」であった。これを受けて詠子はこの人を義姉さんと呼べというの!?!とんでもないことだわ! あたしは反対よ!」(和田慎二 1974：180) と強い口調で言い切ったのである。

つまり、この作品では障害者にも優しい詠子でさえ、いざ身近な問題となると、ついうろたえて反対してしまうということが分かる。また、次の詠子の心理描写において、差別の意識が明確に表れている。「あの美しい人がオシだって気がついたとたん あの人の魅力すべて色あせた 兄貴ったらよりによってオシの人を！」(和田慎二 1974: 181) この発言からも、障害を持っているだけで、人間性の全てが否定されてしまう時代が表れているといえる。さらに、父親も同様に反対の意思を示しながら、「いかん！オシの娘と結婚するなど持つてのほかだ」(和田慎二 1974: 182) と言って兄を勘当するのであった。そして、二人が夕日に向かって歩いていく悲壮なシーンで物語は終了する。



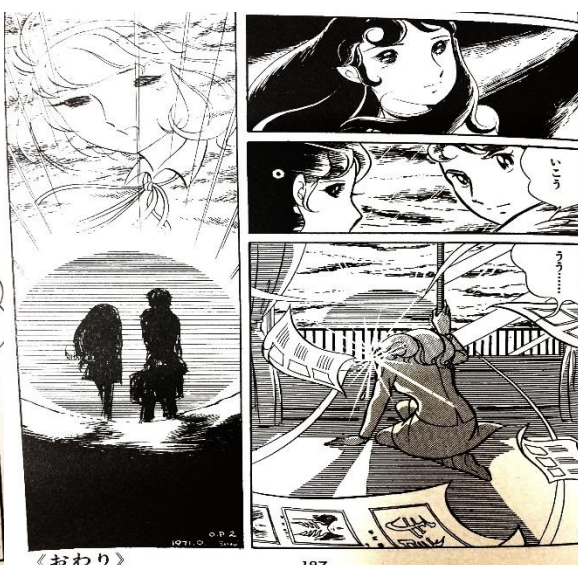
出典:『兄貴にさようなら』(『愛と死の砂時計』) 181 頁より



出典:『兄貴にさようなら』(『愛と死の砂時計』) 180 頁より



出典:『兄貴にさようなら』(『愛と死の砂時計』) 182 頁より



出典:『兄貴にさようなら』(『愛と死の砂時計』) 187 頁より

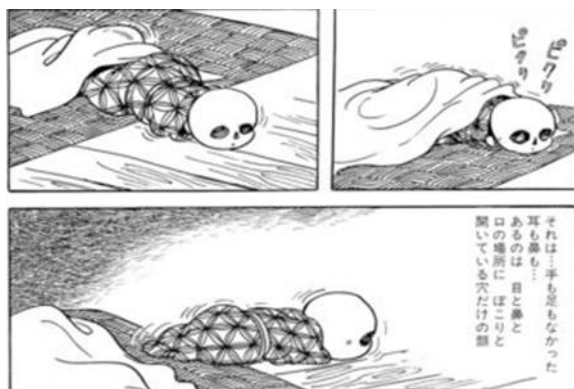
この作品の様に、障害を理由に婚約相手の家族などから反対されるという構成と酷似し

ているのが、車いすの彼、彼女の物語である。しかし、異なる点として、最後まで周りに認められることがなかったということである。そういった意味で、この作品では障害者を取り巻く差別の現実が簡潔に描かれながら、その現実に対する疑問や違和感は描かれていない。つまり、結果的に障害をもつ当事者たちは支援を受けることなく生きていくしかないというメッセージ性を持つ者であり、社会モデルの普及していない時代を表した作品と言える。

1-4 「どろろ」 1971年～1972年

全国各地に戦火が広がっていたころ、権力と天下人を求めて自分の生まれる予定の子供の身体を妖怪に売り渡した男がいた。醍醐景光、彼は四十八匹の魔人に、生まれてくる自分の身体を一か所ずつ与える約束をする。こうして生まれた百鬼丸は、目も耳も手も足も、身体 of 四十八か所の器官を持たずに生まれる。すぐに、「この子は そだたん 育ってもカタワだ」(手塚治虫 1971: 22) と、タライに乗せられて川に流され捨てられてしまう。

流された百鬼丸はたまたま優しい医者に拾われて生き延び、運命に導かれるままに自らの進退を奪った四十八匹の妖怪たちを倒す旅に出る。両手両足には義手義足、目には義眼、耳も作り物でもテレパシーのようなもので周囲の出来事を感じることはできる体を手に入れる。そして48匹の妖怪達を一匹一匹倒して行くたびに、あるときは手が生え、あるときは声が出るようになる。奪われた身体の部分を取り戻しながら、聴覚、味覚、嗅覚といった感覚を獲得していく。



出典:『どろろ』第1巻62頁より



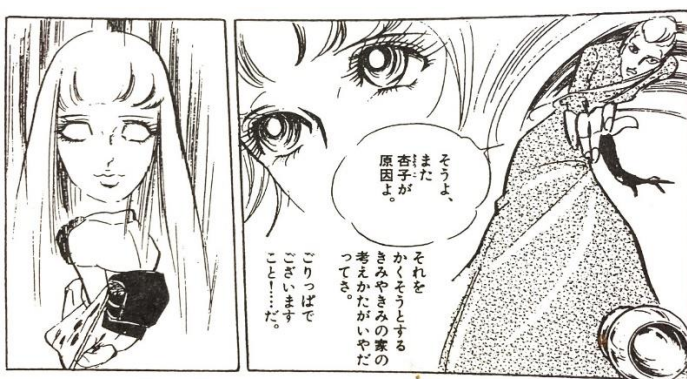
出典:『どろろ』第2巻110頁より

この作品は身体障害のすべてを持って生まれた百鬼丸が旅を通して、そのすべてを克服していく物語だということが分かる。このことから、障害をインペアメントと捉え、治していくという医療モデルや個人モデルに基づいた作品であると言える。また、百鬼丸が生まれるながらにして奪われたものは、単に体の手足や目耳などの具体的なものだけではなく、人間としての生き方や生存権利である。百鬼丸が48匹の妖怪と彼らに奪われた身体を取り戻すことで、自身の生存を取り戻したのである。

1-5「コンチェルト “愛”」 『(さよならは秋の歌)』

主人公である杏子は幼少期、母の喪失時に、母が亡くなる前から父親と関係のあった女性を新しい母親として連れてきたことにショックを受け、声が出なくなる。杏子は16歳になるが、声が出ないまま、家族の中でも邪魔者扱いされ、孤立していく。この時、杏子の家に来たガラス屋の助手の圭介がろうあ者であったことから、手話で話し合う内に、二人はどんどん親しくなっていく。

ところが、家の中で手話を使って語り合う二人の姿が人目に触れたことから、あんこの姉の縁談が破談になってしまう。ますます二人に対する風当たりが強くなるなか、圭介が事故にあってしまう。その事故のために完全に失明した慶介とあんこは2人で旅に出て林の中で薬を飲んで心中するのであった。



出典:『コンチェルト “愛”』(『さよならは秋の詩』) 69頁より

この物語では、家族の中に障害者がいるということは家族の恥であるという考え方が表現されている。当時は、現実の社会でも、親や兄弟たちは障害者を家に閉じ込めてその存在を隠そうとしており、家族に障害者がいるために縁談が破談になるということもよくあったことが分かる。この理由としては、一般的には障害が遺伝するという思い込みが強いことが原因として考えられる。

物語の中で、杏子は姉の縁談が壊れたということに責任を感じて傷つきながらも、圭介との未来を見据えて、耐えようとしていた。しかし、圭介の失明によってそれも失い一気に心中へと進んでしまったことから、障害を持つことは自死に値するほどの事態であり、誰も手を差し伸べてはくれないという現状からも、当事者以外からの救いが一切ないことが分かる。なおかつ、姉の結婚相手側の偏見や周囲の無理解にも一切言及せず、障害者であることの不幸だけが描かれていることから、医学モデル的な作品といえる。

1-6「ブラック・ジャック②-第12話 その子を殺すな！」

この作品では、無免許の天才外科医であるブラック・ジャックという男が主人公である。そんな彼の前に、メスを使わない心霊手術の超能力者ハリ・アドラという人物が現れる。この人物がマスコミに踊らされて、ブラック・ジャックのことを金銭だけが目的の悪徳な医師

であると思ひ込み、対決を申し出る。ちょうどその時、ブラック・ジャックは子宮外妊娠の女性の手術をするところであった。

胎児は検査によって、身体に大きな疾患を持っていることが分かったうえで、母親を助けるには胎児を犠牲にしなければならないと考え、メスをふるおうとした時に、ハリ・アドラが現れる。彼はブラック・ジャックを胎児殺しだと罵り、ブラック・ジャックを押しつけて自分で手術を始めてしまう。ハリ・アドラの心霊手術は成功し、赤ん坊も生きてそのまま取り出すことができた。

ところが、その赤ん坊は「奇形児」だったのである。それは「無頭児」と呼ばれる「奇形」の一種であり、作品の中でも、大脳をまったく欠いた赤ん坊であり生まれても生存能力がないことが説明されている。そこからのブラック・ジャックの言動と行動に注目したい。彼は生まれた赤子を見て「X線像でできそこないということはわかってたんだ だから殺したほうが母親のためによかったのだ!!! それともそんな赤ん坊を生かすのが 神のおぼしめしだったのか?そのカエルみたいな脳ミソのない子がどんな一生を送るといふんだっ 殺せーっ そのほうが慈悲なんだ!!」(手塚治虫 1974: 90) と叫ぶのであった。そういった状態にショックを受け、打ちのめされたハリ・アドラは何も言えずに黙って去るなか、ブラック・ジャックは赤ん坊を殺し、目覚めた母親には「死んでたよ」と伝えるのである。



出典:『ブラック・ジャック』②-第12話90頁より

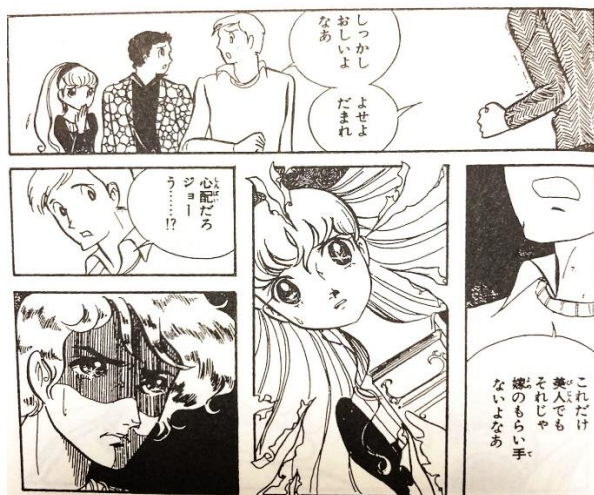
この物語では優生思想が一つのテーマとなっている。障害児として生まれてきた赤子に対して、「できそこない」と表現する部分や、実際に殺してしまう流れをみると、障害児は生かすよりも、殺した方が良いというメッセージ性がみてとれる。このことから、殺してしまうという結末を迎えた点や、障害児が生存するにあたって必要な環境が整っていないという点から、医学モデル的な作品だといえる。

1-7「遠い讃美歌」白い部屋の2人

この物語は、小さい時の病気が元で、ろうあ者になったサリーが、自身の障害と女性という性別によって2重の差別を受ける物語である。サリーはトーマスという男性にクリスマスパーティーにも誘われ、初めてのデートだと、喜びで出かけていったが、無理やりキスされたことで、思わず突き飛ばしてしまう。そのサリーに向かい、トーマスは「お前みたいなツンボ、ただのお茶飲みだけに誘うかよ。ほかの男は近寄りもしないだろう」(山岸涼子 1975: 144)と罵声を浴びせるシーンがある。さらにサリーは、日常的に心無い言葉を耳にすることになるが、そうした状況に違和感を覚えるのは当事者だけという構成で物語は終了する。



出典:『遠い讃美歌』(『白い部屋の二人』) 145 頁より



出典:『遠い讃美歌』(『白い部屋の二人』) 127 頁より

この作品には二つの問題があり、まずは障害者に対する見方である。ちやほよとサリーを取り囲む学友たちは耳が聞こえないと聞いて、態度を豹変させる。「これだけ美人でも それじゃ嫁のもらい手ないよなあ」(山岸涼子 1975: 127) この発言から、この時代においては障害者というだけで、恋愛や結婚などの対象外になっていることが分かる。

そして、一人として、筆談や手話を通してサリーに歩み寄ろうとする者は登場しない。また、彼らの発言から、障害者は人間として認識されておらず、排除の形が見て取れる。さらに、もう一つの問題として、女性に対する差別的な見方も描かれており、障害を基にして、サリーの人間性や人柄は2の次の問題になっていることから、女性として障害者としてという二つの差別が描かれている。以上のことから、医学モデル的な作品であるといえる。

第2節 社会モデル 表2：1980年代初頭以降の作品

制作年	作品名	扱われる障害
1985-1987	「風子のいる店」	言語（吃音）
1988-1990	「遙かなる甲子園」	聴覚障害
1992-1993	「我が指のオーケストラ」	聴覚障害
1995	「歩いていこう」	身体障害
1995	「てっちゃん」	全身障害
1995	「静かなる夜のほとりで」	聴覚障害

「まんがの中の障害者たち」（資料編 聴覚・言語障害者及び それに関連する内容が登場する漫画を基に筆者作成）

1-1 「風子のいる店」

郊外の街に住む高校生の風子は、吃音のために学校で教師やクラスメイトから迷惑がられ自殺を考えるも、逃げ場所を求めて喫茶店「ロドス」でアルバイトを始める。様々な他人と関わり合いながら、風子がしだいに明るく成長していく物語である。

この品の中では、社会モデル的なメッセージ性を有している場面がいくつかあるが、ここでは中でも特徴的な二つの場面を取り上げる。一つ目は、学校の授業中にどもってしまう場面である。「だから そそそその・・・・・・」（岩明均 1986：131）と一生懸命話そうとしている風子に、「だからなんなんだよ」「イライラしてくんなあ」（岩明均 1986：131）と周囲の男子からヤジが飛びかかった。それからは、先生が風子を意図的に飛ばすようになる。それに対して一人のクラスメイトが「先生なんで有沢（風子）さんをとばすんですか？ほかの人はともかくおれはさアもっとゆっくり読んでもらいたいんすよ。有沢ぐらいのペースがいいんだよな」（岩明均 1986：145）と擁護するような発言をする。一方で、自分は迷惑だと言った男子に対して、「おれにとっちゃおまえのほうが迷惑なんだよ」（岩明均 1986：145）と言り返すのだった。

二つ目は、風子が「ロドス」で働く中で、一人の男性に対してコーヒーをこぼすミスをしてしまう場面である。そのミスに対して、男性は風子を恫喝するのだが、吃音である風子は答えることができなくなる。すかさず店長が風子の吃音について説明をするのだが、油に火

を注ぐ形となってしまう、風子は半人前だとしてさらに恫喝されてしまう。この一連の会話を聞いていた他の男性客は、風子を恫喝した男性に対して「あんたはさっき その娘を半人前だと指さしたな。もしあんたの片足がなかったら あんたは何人前になるんだ？」(岩明均 1986, 22 頁) と発言することで、風子を擁護しながら、その場を静める。



出典:『風子のいる店』1巻131頁より



出典:『風子のいる店』1巻145頁より



出典:『風子のいる店』1巻22頁より

この作品で、風子というひとりの障害者を通じて、障害者をも含めてひとりひとりの個性を認め合っていく必要があるというメッセージ性が込められている。また、風子にとっての

障壁となるような発言や態度に対して、風子以外の人間が言及し、なおかつ風子を守るような発言をしていることから、障害を社会的な障壁として捉え、一つの個性として考えようとしていることが分かる。このことから、社会モデル的な障害観が表現された作品であるといえる。

1-2「遙かなる甲子園」

この作品は、聾学校の生徒が制度や、偏見や無知などの障壁に立ち向かいながら、高校野球出場を目指す物語である。聾学校である福里ろう学校は、日本学生野球憲章の第4章に属する普通の学校として認められておらず、大会に出場することや一緒にトレーニングなどの対外活動のすべてが禁止されていた。

この野球憲章について野球部顧問である伊波先生は「それは君たちと甲子園を君たちと社会を隔てようとする壁だ。」(山本おさむ 2001:296) と言いつけている。それでも学校の教師たちが申請を行うも、ろう児にとって硬式野球は危険だということで連盟に却下されてしまう。こうした状況に対して主人公である武明は「僕たちが今ここでやめたらずっと何も変わらない。僕たちだけじゃない ろう学校の生徒が高校野球をやりたいと思った時必ずこの壁にぶち当たる」(山本おさむ 1989:116) と発言し、彼らを取り巻く壁と戦おうと皆に呼びかける。

そして、野球部の顧問でもある伊波先生は普通学校との試合を取り付ける際に「私たちはどこかで障害者は我々健常者とは違った特別の人、障害を持った劣った人と思っています。口には出さなくても私達や私達の社会にはそういう考えがしみついています。我々が高野連に加盟できない本当の理由もそこにあると思います。その考えを前提にした同情や善意を障害者は決して喜ばない。我々の野球部はその前提と戦おうとしています。」(山本おさむ 2005:276) と発言することで、関係者を説得することに成功する。また、野球憲章を乗り越えるために、福里ろう学校の校長も必死に、怒りの気持ちを持って関係者を説得する場面も見られる。

「あの子たちに何と説明するのですか!! こんな平和な世の中にもまだ矛盾や差別がいっぱいある!! そしてそれと戦おうとしても負ける時もある!! あなたがたはあの子らにそうおっしゃるつもりか!!」(山本おさむ 1989 第3巻:152)

こうした校長や教師、生徒たちの尽力もあって、マスコミが福里ろう学校野球部のことを取り上げるようになっていく。それらの声が、遂に高野連盟を動かし福里ろう学校の加盟及び、高校野球出場の切符を手に入れることができたのである。



出典:『遙かなる甲子園』文庫版第2巻296頁より



出典:『遙かなる甲子園』コミック第2巻116頁より



出典:『遙かなる甲子園』コミック第3巻152頁より

この作品では、障害者自身に視点を置くことで、集団としての障害者を描きながら、野球憲章や偏見、無知という大きな壁と向き合い、障害者自身がその壁と戦おうとする姿勢が描かれている。一貫して、障害を障壁として捉えている点が社会モデル的な障害観であることを表している。そして、そういった障壁に対する怒りについても多く描かれている。障害を障壁として捉えるだけでなく、その障壁に対して怒りを持って対抗しようとするような姿勢は障壁に対する挑戦であり、障害観が社会モデルに移行していることを良く表した作品といえる。

1-3 「我が指のオーケストラ」

この作品では、音楽家を目指すも家庭の事情で諦めなければならなかった高橋潔という実在の人物を主人公とした物語である。彼は、聾学校に就職し、聾の子供たちが手話を覚えていきながら、彼らの世界を広げていく姿に感動したことで、その後の一生を聾教育に捧げていく。そして、この物語は、医学モデルに基づいた口話法教育と手話を共通言語としてコミュニケーションツールを提供しようとする手話法教育の物語でもある。口話法教育と手話教育について作中では以下のように説明される。

「口話法のハイニッケは「話す人間」を正常な人間ととらえ『聾』を人間の異常な状態ととらえます だから口話法によって聾児を「正常」な状態に近づけようとします 手話法のド・レペは全く逆の立場に立ちます 彼は聾啞者を正常な人間と見なし『聾』という事実を異常とは見ません ですから『聾』という状態に合った教育手段 すなわち手話による教育を主張するわけです」(山本おさむ 2000 第2巻：296 - 297)

上記の説明に従えば、口話法教育は「聞こえない」、「話せない」といった状態をインペアメントとして捉えている点から医学モデル的な考え方であることが分かる。一方で、手話法教育では聾である状態を異常な状態とは考えず、手話という言語の獲得によって他者との交流を図ることができるとしている。

また、作中では高橋潔は次の様に語っている。「口話法の方々は聾啞者が手話をしないで済む世界を理想とするでしょう。しかし我々は聾啞者が手話をするのが認められる世界、さらにはすべての人々が手話を理解する世界を理想とします。」(山本おさむ 2000 第3巻：92) このことから、聾である状態を欠陥として治していこうとするのではなく、手話という言語を社会が受け入れ、当たり前とすることで、聾者にとっての障壁を取り除こうとする考えが述べられている。

さらに、聾教育の方針を決める総会にて、高橋潔は「聾啞者は少数者であり手話は少数者の言語です 正常者は多数者であり音声言語は多数者の言語であります」(山本おさむ 1993：133) と述べたうえで、「故に少数者は多数者の犠牲になれと申されるのでしょうか 正常者の立場に立ち正常者の言語を強要し、正常者と同様になれと申されるのでありましょうか。」(山本おさむ 1993：134) と語る。この発言から医学モデル的な教育法の阻止を試みていることが分かる。手話という一つの言語を聾啞者から取り上げることを「犠牲」と表現することで、正常者へ近づけようとする口話法教育を批判していることが分かる。



出典: 『我が指のオーケストラ』4-第34話 133 頁より



出典: 『我が指のオーケストラ』4-第34話 134 頁より

この作品の中では、医学モデル的な教育に立ち向かう高橋潔を主人公としていることから、社会モデル的な障害観を有していると言える。そして、聴覚障害児への教育の変遷が描かれており、当初は主に手話を中心としたものであったが、「聾学校」への移行に伴い、全国的に口話主体の教育へ変わることが描かれている。この教育法については、高橋潔も、聞こえない子どもたちに「話す」スキルを与え、口の動きから会話を理解させるという点で一定の意義があると認めている。

しかしながら、全面的に手話を禁止することは、生まれつきの聴覚障害児にとって相当な負担となるだけでなく、そういった子供が口話を十分に習得することは、ほとんど不可能に近いと説明されている。作品の中で高橋潔は、矯正が可能な人には口話法を、不可能な人には手話法を教えるべきだという、一人一人に即した教育法を、身を賭して提唱し続けた。

こうした試みが実を結んだこともあり、現在では手話言語条例が 31 都道府県の 434 自治

体で制定されており、手話が音声日本語の獲得の妨げにならないことも分かってきている。また、2006年には国連総会において、手話は言語であるという障害者権利条約が採択され、国際的に言語として認められるようになった。この流れを受け、全日本ろうあ連盟などが「手話言語法」の制定に向けて啓発活動を行っている。

1-4「歩いていこう1」

この作品では、結婚式を目前に控えている時に、事故で「頸椎損傷」になり歩けなくなってしまった春奈が主人公である。彼女は下半身の感覚すら持てず、排泄も自分一人ではできない。そんな春奈は、婚約相手である柊一との結婚も一時あきらめようとする。しかし、柊一はあくまで春奈と共に生きていと、改めて二人の結婚を目指していく。

春奈が障害者となり、春奈と柊一の二人の関係が変化していなかで、春奈と同じく頸椎損傷になったばかりの少女が、自分の家に帰るとうれしい反面それ以上に不安になると話す場面がある。「家はまるで車椅子を拒んでいるみたいに 畳の部屋も狭い廊下も敷居もあたしの不自由を思い知らせるものばかりで両親に迷惑かけるだけかけてこのままずっとこんなかと思ったら 不自由な体がすごく怖いことに思えて また落ち込んで……」（青山くみこ 1995：134）と語る。春奈も、障害者を取り巻く重圧に悩む。柊一に負担をかけるだけで、いずれそうしたことに疲れた柊一に捨てられるのではないだろうかという不安に悩まされ、結婚も取り止めようかと考える。

しかし、柊一は、たいした問題ではなく、お互いが必要としあえるかどうかが重要だと言い、春奈の不安を払拭する。これを受けて、春奈は柊一との結婚を決める。より障害に対して障害の問題を他人事として捉えていないことが分かる場面がある。春奈の仕事を探すために訪れた職業リハビリセンターでの、二人の会話にて、「今 健康でも俺だっていつ体が不自由になるかわからない 『不自由の人』が外に行きにくい環境ばかりだから 忘れがちだけど おれたちの社会は『不自由の人』がいてあたりまえの社会のはずだよ」（青山くみこ 1995：157）と柊一は語る。



出典：『歩いていこう』1-第3章 134 頁より 出典：『歩いていこう』1-第3章 157 頁より

この作品から、当時の日本の家や街は、障害者も自由に行動できるような環境が、現在よりも整っていなかったことが分かる。また、そうした家や街に拒まれることで、家族や恋人、友人へ負担をかけざるをえなくなる。この負担こそが、当事者にとっては迷惑をかけることであり、迷惑をかけているということから、より一層自分自身を追い込んでしまう傾向がこの作品から見て取れる。

しかし、柘一が言ったように、障害者もいてあたりまえの社会だと考えてこそ、負担をかける側とかけられる側がいるのではなく、二人で一緒に生きていこうとする立場に立てるのである。こうした柘一の発言や、上記の少女の発言から、障害の帰属場所を家や街などの社会に規定していることから、社会モデル的な障害観を読み取ることができる。

さらに、障害を持つということ、それ自体を自分事として捉えながら、一種の危機感を持つ柘一の発言は、健常者と障害者というカテゴリー分けの無意味さを言い表している。このことから、障害者が直面する問題は社会全体の問題であるべきだという、メッセージ性を持っており、物理的な障壁だけではなく意識の障壁を取り除く必要性も主張されていることが分かる。

1-5 「てっちゃん」

この作品は、てっちゃんという脳性マヒの男の子とその家族の物語である。「脳性マヒ」と診断された生後三か月の時からの哲治の成長過程をとおして、周囲の人びとの状況を丁寧に描いている。介護ボランティアを探す苦労や、レストランや水族館などで入場を断られたりする現実も分かりやすく描かれている。この現実に対して、てっちゃんの母は「……日本は本当に障害者には住みにくい国ですよ。」(池田文春 1996: 211) と語る。また、日本社会における物理的障壁の多さについて、「日本は物はたくさんあるかもしれないけど 真に豊かになるにはまだまだという気がするわ」(池田文春 1996: 212) と語る場面もある。

そして、少しでも体の機能を取り戻すための訓練を何年もかけて行う姿も描かれており、てっちゃんと共に生きる家族の成長も物語のテーマとなっている。そうした成長の中で、障害を持つ子供の親としての気持ちも表現されている。家族団欒で食事をしている際に、支援する家族が元気でなければいけないという話の最中に、てっちゃんの父が「俺達は哲司(てっちゃん)がちゃんと一人前になるまでは死ねないんだよな」(池田文春 1996: 224) と一言こぼす場面がある。この言葉からは、サポートが充分ではないという現実と、家族としての不安が表現され、当事者の直面する問題を簡潔に描いている。



出典:『てっちゃん』-最終話 211頁より

この作品では、物理的な障壁に阻まれる障害者を描きながら、その障壁に対して異議申し立てをしていることから、社会モデル的な物語であるといえる。そして、車いすに乗っているという理由で、入店を拒否されてしまうことは、すなわち社会から締め出されていると捉えることができる。障害概念がどれだけ変わろうとも、生きる場としての街や道路における物理的な障壁を取り除かない限り、障害者の生きづらさは変わらないということを改めて実感させられる作品である。

1-6「静かなる夜のほとりで」

美鈴という耳の聞こえない女性が調理師の専門学校に入る所から物語が始まる。最初はトラブルも起きるが、友達にも恵まれながら念願の調理師への道を一步ずつ歩いていく。そうした学校生活の中で、いろいろな聴害者を取りまく状況やエピソードが作品には盛り込まれている。

ある日、校内に授業の部屋が変更になったというアナウンスが流れるが、聴こえない美鈴は遅れて到着してしまう。そこで厳格な先生に、遅刻は許さない、と怒鳴られてしまうが、美鈴が聞こえないとわかると今度はクラスの全員に尋ねる。「誰も教えてやらなかったのか」そして一言、「全員教室を出ろ そういう理由なら遅刻の原因はお前たちの方にある 教えなかったお前たち全員遅刻とみる」(横谷順子 1995 第1巻:172) と言う。この場面から美鈴を取り巻く環境自体に非があったことを表現している。



出典:『静かなる夜のほとりで』①-抱擁-172 頁より

美鈴は友達と旅行して、とある高級ホテルに宿泊した。そこで、ホテルの従業員と意思疎通がうまくできなかつたことで美鈴は雨の中で迷子になってしまう。この一見を終始見守っていたドイツ人の女性は、「でも不思議ね支配人 このホテルは私の国の言葉をわかる人はいてくれるのに 彼女の国の言葉をわかる人はいないのね。」(横谷順子 1995 第一巻:40)と支配人に語る。この発言から、手話を一つの言語として捉え、コミュニケーションにかかわる障壁を取り除いていくべきだというメッセージ性を読み取ることができる。ホテルなどのサービス業界では外国後の通訳や説明書が用意されていることが常識となっているものの、手話に関しては見落とされていると、読者に気づきを与えるエピソードであった。



出典:『静かなる夜のほとりで』②-彼女の国-40 頁より

この作品では、一貫して社会モデル的な障害観が描かれている。例えば、校内アナウンスが聞こえなかったことで、遅刻してしまった美鈴を叱るのではなく、その周りの人間に対して注意する場面は、極めて分かりやすく社会モデルを表現したものである。また、健常者にとっての当たり前が障害者にとっても当たり前ではないのだというメッセージ性が多くみられる。昨今では、障害を個性として扱い、平等な関係を築こうとする流れがある一方で、現実的に、健常者にのみ配慮された社会環境は至る所に存在している。そういった、健常者であるがゆえに気づかないままであるような問題点にも光をあてた作品であると言える。

終章 まとめ

本研究では、まず、多くの人々にとって身近な媒体の一つであるマンガを読み解くことで、障害に関しての重要な示唆を得ようと試みた。その一環として、障害概念における医学モデルから社会モデルへの移行と、マンガにおける障害表象の推移との対称性を、具体的な作品を列挙していく中で論じてきた。その過程で、医学モデル的な障害表象は1980年代初頭以前、以降にかかわらず、描き続けられているものの、社会モデル的な障害表象は1980年代初頭以降を境にして、描かれていることが分かった。

このことから、障害概念とマンガにおける障害表象には、明確な関連性が認められ、双方の関連性と転換を確認することができた。この点に関しては、先行研究の一つである、「映画における障害表象—コミュニケーションの問題として描写される障害」での考察結果と同様の結果である。

しかし、本研究の分析を通して、映画とマンガにおいて1980年代以降に支配的となる障害表象モデルが異なることが明らかになった。映画における障害表象は依然として医学モデルが優勢であると考察されているが、マンガにおいては、救いようがない医学モデル的な結末を迎えるような障害表象は少数派になってきている。こうした違いが、なぜ媒体によって生じているのかについては、今後の課題として提起したい。

本文 17952 字

引用文献

- Barns, C., Mercer, G., & Shakespeare, T. (1999) Exploring Disability: A Sociological Introduction, Polity Press. (=2004、杉野昭博・松波めぐみ・山下幸子訳『ディスアビリティ・スタディーズ——イギリス障害学概論』明石書店.)
- 外務省 (2023) 「障害者の権利に関する条約, 前文」
(https://www.mofa.go.jp/mofaj/fp/hr_ha/page22_000899.html, 2023.12.8).
- 塙幸枝 (2015) 「映画における障害表象 コミュニケーションの問題として描写される障害」『Japanese Journal of Communication Studies』 Vol.43, No.2, pp.109-124.
- 倉本智明・荒井祐樹・後藤吉彦・ほか編 (2010) 『手招くフリーク文化と表現の障害学』生活書院.
- 松岡 克尚 (2010) 『障害モデル論の変遷と今後の課題について』関西学院大学 人権研究, 第14号, 13-33.
- 永井哲 (1998) 『マンガの中の障害者たち—表現と人権』解放出版.
- 全日本ろうあ同盟 (2023) 「手話言語法制定推進事業」(<https://www.jfd.or.jp/sgh> , 2023.12.14).

分析対象としたマンガ

- 青山くみこ (1995年) 『歩いていこう』1-第3章-, 講談社.
- 岩明均 (1986年) 『風子のいる店』1, 講談社.
- 池田文春 (1996年) 『てっちゃん』-最終話, 編集・ホーム社/発行・集英社.
- 牧美也子 (1973年) 『コンチェルト “愛”』(『さよならは秋の歌』), 秋元書房.
- 永島慎二 (1967年) 「漫画家残酷物語」②, 朝日ソノラマ.
- 手塚治虫 (1971年) 『どろろ』(第1巻), 秋田書店.
- 手塚治虫 (1974年) 『きりひと賛歌』(中), 大都社.
- 手塚治虫 (1974年) 『ブラック・ジャック』②-第12話, 秋田書店.
- 和田慎二 (1974年) 『兄貴にさようなら』(『愛と死の砂時計』), 集英社.
- 横谷順子 (1995年) 『静かなる夜のほとりで』①-抱擁-, 秋田書店.
- 横谷順子 (1996年) 『静かなる夜のほとりで』②-彼女の国-, 秋田書店.
- 山岸涼子 (1975年) 『遠い讃美歌』(『白い部屋の二人』), 集英社.
- 山本おさむ (1989年) 『遥かなる甲子園』コミック版, 第2巻, 双葉社.
- 山本おさむ (1989年) 『遥かなる甲子園』コミック版, 第3巻, 双葉社.
- 山本おさむ (2005年) 『遥かなる甲子園』文庫版, 第2巻, 小学館.
- 山本おさむ (1993年) 『我が指のオーケストラ』コミック版, 第4巻, 秋田書店.
- 山本おさむ (2000年) 『我が指のオーケストラ』文庫版第2巻, 秋田書店.